



TITLE:

近代化と東南アジアの形成

AUTHOR(S):

斎藤, 正寿; 玉田, 芳史

CITATION:

斎藤, 正寿 ...[et al]. 近代化と東南アジアの形成. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書
シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996,
18: 47-54

ISSUE DATE:

1996-05-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187567>

RIGHT:

近代化と東南アジアの形成

斎藤 正 寿

「東南アジア」という括り方で我々はどうのような語り方をしてきたのか、その他のオルタナティブとしての語り方はあるのだろうか。今後私が研究していく上での反省の意味も含めて考えてみたいと思う。ただ、国際政治、国際関係が今までの私の関心であり、経済や経済史というものは私の視野にはなかった。今日の発表も、そういう視点が全く欠落してしまうおそれがある。また「東南アジア」の括り方を考える際に、第2部のテーマである「戦後世界」にまで思いが至らなかったことや、「東南アジア」の語り口を考えていながら、次第に「近代化」そのものの語り口の方に考えが傾斜してしまっていることなど、至らない点は後のディスカッションで皆様に補完して頂ければと考えている。

「近代化」という言葉は、分析概念として使うこともあれば、実際に近代化論というある種のイデオロギー政策的な方針として語られることもある。問題がさらに複雑なのは、近代化が我々の中に内在化し、それが行動に影響を及ぼすというレベルがある。今日の話では、基本的には分析をする時の「近代化」という言葉が、どのように意識的、または無意識的に使われてきたかということに焦点を当てた形になると思う。

基本的に「近代化論」と言われるものは、その是非はさておき、現状としては廃れている。しかし、「近代そのものを語る」ことは、東南アジアにおいても、更にはその他の地域に目配りをしたときにも、依然として流行の中にある。「近代化」いわゆるモダナイゼーションがどんなものだったのか、まず整理しておきたいと思う。一つはハンチントンの非常に有名な定義で、モダナイゼーションとは multifaceted process である。バラバラには起こらず、色々な諸相があるまとまった形で起こるものだということであり、また、社会の構造変化の総体であるとしている。実は近代化論が廃れたのは、むしろ構造変化の総体そのものを論じることに意味が無くなったか、もしくはそのこと自体が成功しなかったところに原因があるように思う。その結果、近代を語る場合、例えば都市化であるとか、工業化、世俗化、民主化、教育、メディアの発展等々、一つ一つの局面や指標に分けてそれぞれを語るような方法が出てきている。かつて、近代化論の大きな柱であった工業化戦略、ないしは封建社会から資本主義社会への移行という、非常に図式的な意味での近代化はもはや語られない。しかし、観察測定可能な指標局面に分けて考える形での「近代化」の語り口は依然として隆盛である。もう一つは、メタレベルのような、意識、行為の中での変化を近代化に見るタイプの議論も、社会学、文化人類等のディシプリンの中で行われている。

それでは東南アジアにおける「近代化」は、実際にはどのように語られてきたのだろうか。立本氏は『講座・現在の地域研究』の中で、「近代というのは歴史的な概念である。もし東南アジアにおいても近代という言葉を使うのであれば、東南アジアの近代の内容が先になければならない。しかし現実には東南アジアには近代が無いという前提から出発し、近代化という変化のモデルを東南アジアの時代区分とは関係なく当てはめて、時代を区切ってしまっている。」と述べられている。私もこれが東南アジアにおいて近代化が語られる前提になっていると考えている。

大半の東南アジアの国々は植民地国家として成立したが、「工業化を伴った近代化」という形では捉えたり、工業化がリーディングセクターとなって社会の総体に変化していくという、教科書通りの視点で見たりするのではなく、西欧の思想と制度が東南アジアに移植された現象を「近代化」と捉えるのが一般的である。およそ19世紀後半から20世紀にかけての東南アジアを読む場合、それが現在までの我々の習慣であったと考えられる。

また東南アジアで「近代化」を語る際に、どうしてもそれをナショナリズムの揺籃期、ないしはその曙と捉えている側面がある。しかし、これは「遡及史観」によるものだと思う。確かに歴史は今から振り返った過去の像ではあるが、我々は今ある重要なものに着目し、過去に遡ってその原点を探し出す作業をしている。その際には、どうしても今ここにはないものは見落としてしまう。東南アジアにおける、今ある形の近代を今の時点から振り返ってしまうと、その時代にはあったはずの様々なバリエーションも、今ここに無いがために見えてこない。今の国民国家が仮そめにも成功している東南アジアでは、国民国家、ナショナリズムにつながらないものは、あまり我々の目配りに入ってこないと言えるのではないか。

ただ一つつけ加えておきたいのは、東南アジアにおいて語られる「近代化」の現象は、果たして東南アジア特有のものと言えるのだろうかということだ。実際にはヨーロッパ以外の世界においては一般に当てはまるのではないか。ここで東南アジアの近代化の特徴として語ったことも、そう考えれば足もとをすくわれることにもなりかねない。決して東南アジア特有の現象ではないということに、我々は注意しておく必要があるだろう。

従来の研究における、東南アジアの「近代化」の語られ方を分類的に見てみようと思う。一つに「接触変容型」である。「近代化」ないしはその中のいくつかの局面を取り出し、それが進展したということによって、東南アジアの「伝統的」な社会が大きな変容を被ったとするタイプの語り方である。次に「複合社会併存型」。「近代化」が、東南アジア社会の中に、従来とは異質な社会をつくり出す。しかし必ずしもそれが従来の社会を全てオーバーライトしてし

まうのではなく、「伝統的」な社会と併存していく。そこに東南アジアの従来の社会の強靱さ、したたかさを見るタイプのものである。それは、ファニーバルの複合社会という形で典型的にモデル化されるタイプのものでもある。もう一つが「伝統社会捏造型」。すなわち近代が東南アジア社会に進入して以降、「近代」という知の在り方そのものが、それ以前に存在した東南アジア社会を非常に意図的に「伝統」として作りあげた。それまで存在したものではないものが、「近代化」によって捏造されたのだという議論がなされることが、最近多くなったと思う。

では具体的に、東南アジア、特にインドネシアの公教育がどのような語られ方をしてきたのかを例に話をしてみたい。公教育制度は、近代化の中で非常に代表的な指標として用いられることが多い。従来の東南アジアにおける教育と異なる点としては、国家のコントロール、学齢期の設定、カリキュラム、公定の教科書、もしくはディプロマが社会的な昇進の鍵になる等々のことが、その性格づけとして挙げられるだろう。インドネシア(蘭領東インド)の場合には20世紀初頭に西洋教育が入ってくる。ジョージ・ケイヒンは、「a rapid change in the overall character」と、この西洋教育がかなり広範なものだったと述べている。もっと言えば、ケイヒンの論文によって「インドネシアの民族主義研究において、近代化された西洋教育を受けた人間こそがナショナリストの担い手なのだ」という公式が作られ、この後のインドネシアにおけるヒストリオグラフィーに決定的な影響を与えていったと考えることも可能だろう。

土屋氏の『インドネシア民族主義研究』では、タマン・シスワという私立学校の持っていた意義が語られている。『「植民地秩序」に拮抗するカウンター＝インスティテューション(対抗制度)としての役割を前面に掲げようとしてきた。』という意味で、タマン・シスワが非常に重要であるとされている。その時に問題なのはカウンターではなくインスティテューションで、その時のタマン・シスワが対抗するカウンターであるとすれば、カウンターではないインスティテューションとは何なのか。そのことに付いては言及されていないが、どうもインスティテューションというのは植民地秩序であり、これは自明だと考えられているように思う。明らかに自明であるという中で、カウンター＝インスティテューションという言葉が使われているのだろう。

次に、アンダーソンのあまりにも有名な『想像の共同体』では、いわゆる「二重螺旋の階段を登る」と書いている。一度めには西洋の教育において、植民地である蘭領東インドの中で、地方からセンターであるジャカルタに向かって、初等、中等、高等教育の階梯を、螺旋階段のように登っていく。そして2度めに、彼らが植民地官僚、役人となってもう一度地方から回って、出世とともにだんだん中央に戻っていく。彼はそれを想像の共同体、いわゆるナショナリ

ズムの発生の源とする書き方をしている。これが教育のもたらした変化として、非常に大きな捉え方をしている。

白石氏の書かれた『An Age in Motion』でも、近代化の一つの指標と思われる公教育がもたらした働きが語られ、そのコンテクトそのものはケイヒンとも共通しているが「guid them to modernity」という象徴的な言い方がされている。

このように見渡せば、ここ40年にわたってその語り方に大きな変化はなかったように思う。その特徴としては、接触変容型と言われるように、かなり大きな変化をもたらしたという認識がある。また、植民地国家が非常に単一のアクターとして想定されている。もう一つは公教育そのものが、ブラックボックスとして扱われている。すなわち公教育制度ないし思想の中味は問われずに、その後に出てくる民族主義運動の前段階として語られている。結果そのものが重要であって、公教育の中はブラックボックスでもかまわないという形の語り方が見られる。さらに、どれもサクセスストーリーである。特にインドネシアでは、民族主義運動がある意味では完全な形で開花している。その後の国民国家形成にも、他の国よりディスティンクティブな形で起こったと見られており、その意味で「近代化」は、サクセスストーリーのプロローグとして起こったという判断が、抜き差しがたくあるように思う。

では、本当にこのような語り口でよいのか。それは私にはまだわからないが、新しい語り口を探す上でも、このことは常に問い続けていたいと思う。ここでは議論の論点を増やすという役割に徹して、とりあえず新しい語り口を提示していきたいと思う。

まず、土屋氏が文化主義のところで出された『「関係」(東南アジア)と「関係」(西欧、植民地宗主国)が「関係」する視点』である。東南アジアそのものが、ある了解の構造の中での、関係性の中で存在するものだとなれば、当然、西欧や植民地宗主国と我々が簡単に片づけてしまうものも実は関係である。しかし実際にはそう簡単にはいかない。それらの諸関係が近代だと我々が認識する20世紀初頭において、非常に密な関係がそこで起こったとするならば、もし「近代」という語り方で「関係」に焦点をあてるとするならば、関係の濃淡、もしくは関係のとり結び方が中心に考えられ、「東南アジア」という像の重要性は薄れてくる。結びつきとしては、例えばインドネシアと南アという方が、「関係」と「関係」の「関係性」というレベルでは、非常に近似しているのではないかという発想さえも生まれてくるように思う。

もう一つは、「ブラックボックスの中身を解析する視点」を挙げてみたい。ただ、資料的な限界、あるいは昨日の議論のように、そういう内実を見る時にどういうディシプリンを持ちうるのかという問題もある。しかし「近代」をあまりナイーヴに捉えることなく、ある意味では

徹底して細かく見ることも必要だろう。それが新しい切り口となりうるかもしれない。

そして、「近代化＝ナショナリズムの曙という図式を一旦棚上げする視点」を出しておきたい。「近代化」がナショナリズムのプロローグだという一種の公式をやめてみることも、一つの在り方なのではないか。この図式が間違っているとは決して思っていない。ただあまりにもそれに拘束されてはいないか。やはり、ナショナリズムの先に国民国家があり、国民国家と近代化が非常に分かちがたく結び付いている。一旦それを切り離すことも、一つの思考実験なのではないかと考えている。

安川哲夫氏の「近代イギリスにおける＜学校教育＞の誕生」という論文の中で、「近代において学校教育が格別な地位を占めるようになってきたのは、啓蒙的な知の論理などでは決してなかった。ましてや国家や家族の要求でもない」「社会的結合様式のあり方そのものが変化した」と書かれている。おそらく我々は近代総体を語ろうしている。しかしその時には、東南アジア地域という枠をはずさねばなくなるだろう。もう少し中範囲、ないしはもう少し大きなグランドセオリーの方にいく。では東南アジアにこだわって近代の総体を論じようとするとうなるのか。おそらく「東南アジアにおける近代化目録」という、リストを作ることに終始してしまうのではないか。それが新しい語り口、あるいは我々に新しい知見をもたらすものだとは思えない。やはり総体を語るといふより、我々が前提としてきた近代の指標や局面を一つ一つ考えなおす方が、東南アジアの近代を考える際には有意義だと思う。

東南アジアがあって、そこに「近代化」が押し寄せたのではない。むしろ近代化の中で「東南アジア」なるものが形成されてきたと考えれば、その途上では東南アジアは無かったと考えても、それは思考実験としては許されるだろう。このような意識で新しい語り方を模索していくべきではないだろうか。

コメント

玉田芳史

国民国家の成立について、タイ政治研究者の立場からコメントしたい。国民国家が成立する前提条件として近代国家が必要である。その近代国家とは領域支配の確立を特色としている。つまり、明確な国境線を持ち、その内部では画一的集権的な支配が行われるようになるということである。こうした支配様式は古くから存在するものではなく、その確立は近代化の所産である。植民地支配を経験した国々では、そうした領域支配は植民地支配の確立によってもたらされた。言い換えると、植民地時代に近代国家の枠組みが形成されたのである。独立を保ったタイでも、近隣諸国で領域支配が確立されるのと時期をほぼ同じくしてチャクリー改革によって近代的な国家の体裁が整えられた。斎藤さんが指摘されたように、近代国家の枠組みの成立は、東南アジアに、あるいはその植民地化された地域に特有の現象では決してなく、普遍的な現象である。

こうした近代国家が国民国家へと向かってゆくときに、教育が重要な役割を果たしたと言われてきた。国民国家の成立とは、国民ないし国民共同体が国王や外国人に代わって新たな主権者になることを意味している。その際に教育が役割を果たすわけであるが、それには2つの面があると思われる。1つは文字通りの国民形成である。これは国民共同体を想像する作業、国民意識を抱く作業であり、近代に特有の現象である。ここには教育内容そのものだけでなく、斎藤さんが言及された学校教育制度を通じて「二重の螺旋階段をのぼる」ことも含まれてくる。そして、もう1つは国民国家こそ国家のあるべき姿であるという人民主権や民族自決の正統性イデオロギーの浸透である。この国民形成と国民国家モデル化は不可分の関係にあるが、歴史的には後者が先行するはずである。タイの王朝国家や東南アジアの植民地国家において、既存の政治体制の正統性を脅かしかねない国民形成作業が学校教育を通じて積極的に進められたとは思えない。そこで教育が果たした重要な役割は、国民国家こそ正しいというイデオロギーにアクセスしうる知識人を生み出した点にあるだろう。

植民地の場合には、独立運動は主権の受け皿となる国民を必要とする。独立は国民の名において要求されなければならないからである。それゆえ、これらの知識人は国民共同体を形成する作業に立ち向かうことになる。それは水平的(地理的)距離や垂直的(階級的)距離を克服する共同体である。実際に独立が達成されたときには、国民形成はまだ完成しておらず、独立後

に学校教育を通じて未完成の国民共同体を完成させる努力が続けられることになる。タイの場合には国王専制体制を打倒した1932年立憲革命以後そうした国民形成努力が行われた。つまり、学校教育が国民形成に果たす役割は、「国民国家」成立前よりも成立後の方が大きいのではないか。

最後に、近代国家や国民国家の成立が、このシンポジウムの共通のテーマである「東南アジアの形成」に関係するとは思えない。近代国家の枠組みの成立によって、国家という枠は意識されるようになった。しかし、自律的に東南アジアという枠を意識するようなこと、あるいは「東南アジア」という結びつきが生まれてくることはなかったと思われる。他方、他律の面においても、たとえば日本の東南アジア地域認識は結構古い時期からあったという指摘が昨日のセッションでなされていたが、にもかかわらず、最近の末廣さんの論文には、日本政府が「東南アジア」を現在の東南アジア地域と同じように認識するようになるのは1965年以降であると書かれている。他律の面から見ても、「東南アジアの形成」はかなり新しいといえるだろう。

質疑応答

坪内 最後に「近代化の中で東南アジアなるものが形成された」という、極めてチャレンジングな表現をしておられるが、「東南アジアが形成された」という言葉と「近代化の中で」という言葉を繋ぐときに、誰にとって形成されたのかという主語を明確にしてほしい。近代化の中で東南アジアを「東南アジア」として見ていこうという位置づけは、他律的観点からは様々にある。斎藤さんの場合には、どういう観点から出された言葉なのか。さらに、「国家」を除いたときの「東南アジア」の存在について、斎藤さん自身の考えがどういうものかを伺いたい。

斎藤 昨日までの発表と違い、私の場合はあくまでも他者的な視点であり、我々が何をどう語ってきたかを考えようという主旨だった。

最後に述べたところは、「東南アジア」という確固たるものがあり、そこに「近代」が明確な形で入ってきたという考え方は、あまり正しい答えのようには思えない。「近代化」の持つ意味が非常に広く、知の制度、知のあり方そのものまで含めて考えるとすれば、もし近代化が起こらなければ、我々は東南アジアという枠組みでものを語る必要性を感じないかもしれないし、東南アジアの人々にとっても要請はなかったのではないか。その意味から考えれば、「東南アジアの形成」と「近代化」は同じプロセスの中にあるのだろう。

「東南アジア」の中に「近代化」というボールが投げ込まれたんだという考え方は、あまりにもナイーブではないかという考えである。

また、「国家」を除いた場合はどうかとい

う質問があった。1920年代を考える場合、我々は非常に多くのものを見落としているように感じている。いまある現象の芽を過去に探そうとするときにも、現在の国家の枠組みが非常に強く、我々はどうしてもその中から過去を見てしまう。だが、その当時はまだ国家の枠がそれほど強くなかったと考えていけば、別の可能性も当然あったはずだ。そういう意味では、近代化の局面をミクロに見ていく場合、国家を抜きにしても考えることができる。その場合に出てくる社会の紐帯や人間のネットワークは、「東南アジア」を一括りに一体化させるものかどうかはわからない。しかし、それは「近代化」と非常に深く関わるものだろう。「近代化」を語るときには覆いが被さり見えなくなってしまう。だが、逆に見えなくなることそのものが近代化なのだと思う。国家の枠をはずした先にあるのは「伝統」だという考え方が従来されてきたと思うが、私は必ずしもそうは考えていない。例えば、商人ネットワークを「従来からある現地に根付いた伝統的なネットワーク」という語り方もあるだろうが、それ自体が変化しているものであり、近代化のダイナミズムの

中で、人々の動きの変化を捉えることも重要なのだと考えている。

西村重夫 近代化の指標として教育を取り上げておられたが、近代教育と近代化を考えていった場合、どうしてもいくつかの指標があるかと思う。例えば、近代化に伴って教育は義務化し、あるいは無償化、世俗化(宗教による支配からの脱却)していく。その近代化の指標は欧米中心の考え方から生まれ出てきたものだろう。むしろ東南アジアの場合、宗教は近代化にともなって廃絶される部分もある一方、同時に尊重されている部分がある。世俗化という部分だけで見ては読み取れない部分があるように思う。

斎藤 そのとおりだと思う。特に、宗教ないしは近代公教育と、同時に「近代化」している宗教教育との間の関係は非常に大切だろう。そういう論点を全く落としていた。後の討論のためには、いわゆる「近代化論」や開発独裁、権威主義体制というものを論じた方が、東南アジアの形成と地域連関の中では大事なトピックになったかもしれない。後のディスカッションの中で、レンジを広げて議論していただければと願っている。